

2) ヒヤシンス＝風信子

ヒヤシンスはギリシャから中近東、地中海沿岸を原産地とするユリ科の多年草で、世界に 30 種類以上が分布している。花は芳香の強い総状花序で、よく見ると花弁の先は 6 裂した釣鐘状になっており、なるほどユリ科と肯ける。ギリシャ神話によればヒヤシンスは美少年『ヒュアキントス』の化身だとされている。彼はスパルタ王アミクラスの子といわれ、太陽の神『アポロン』と西風の神『ゼフィルス』と 2 人の神から寵愛を受けていた。いわば男同士の三角関係である。ところがある日のこと、アポロンと円盤投げをして遊んでいると、嫉妬に狂ったゼフィルスは突如として強風を吹かせたために、アポロンの投げた円盤はヒュアキントス少年の頭に当たり、この美少年は非業の死をとげる。この時に地上を赤く染めた血の中から咲いた花が、ヒヤシンスだというのである。ギリシャ神話独特の物語だが、前述の水仙といいヒヤシンスといい、現代の風潮にどこか似ているのがギリシャ神話なのである。

ヒヤシンスの学名は『*Hyacinthus orienthalis*』で、この物語のためかヒヤシンスは不幸や悲しみを象徴するものとされてきた。アポロンはヒュアキントスの死を悲しんで、“Ai,Ai”と嘆息を漏らしたという。この Ai,Ai という発音は [Æi] と似ており、この言葉が「永遠」という意味であるところから、ヒヤシンスは永遠の「思い出」を象徴するようになり、ヨーロッパでは墓石の上などに、この花が刻まれるようになった。しかしこれとはまったく異なる説もある。このヒュアキントスは今のアイリス、或いはヒエンソウかマルタゴンユリのことだというのである。世界のあちこちで似たような話があるのだろう。一方、古代ローマの植物学者ディオスコリデスは 1 世紀頃に著わした『薬物誌』の中で、ヒヤシンスの球根は胃腸に良い薬草だと述べている。

時代が下るとヒヤシンスはチューリップとともにヨーロッパでは最も人気の高い球根となった。そもそもこの植物の起源は、神聖ローマ帝国の使者として 16 世紀にオスマン帝国を訪問した、ド・ブスベック＝O.G.deBusbeque(1522～1592 年)が、ヨーロッパに持ち帰ったのが最初である。その後 1585 年にはウィーンにもたらされ、18 世紀にはオランダで改良され 2,000 もの新品種が生まれた。ブスベックはこの時、チューリップもヨーロッパに紹介し、当時は両方とも大流行となったのである。

ヒヤシンスが日本に渡来したのは 1863 年のことで、ちょうど黒船が日本の幕府に開国を迫っていた時代である。この頃に渡来した欧米の植物は実に多く、次に登場するチューリップも同様である。文明開化とはまさに欧米の生活すべてを、日本人の暮らしの中に、取り入れることだったのだろう。漢字では『風信子』と書いた。幕末から明治にかけて外来語はことごとく音訳されて、カタログ(catalogue)は『型録』に、パリは(Paris)『巴里』になったが、カタカナの役割を巧みに利用して、日本人の言葉として書き改めていった。このあたりにも維新の意気込みを感じ取ることができよう。カタカナという文字が、外国の異文化を容易に日本の文字に置き換える働きを

した結果、欧米文化はいち早く日本人にも馴染んだ。しかし文明開化の時代が過ぎると、日本の独自性や伝統的な良さを失わせる結果になった、といえるかも知れない。

さてヒヤシンスにも2系統があつて外見が異なる。その一つはローマン・ヒヤシンスで、花茎は細く花弁は外側に反転し、性質は強いが花付きは粗である。もう一つがダッチ・ヒヤシンスで、こちらの方は花茎が太く花をびっしりと付ける。よく水耕栽培されるのもこの品種で、一般的にもダッチ系の方が好まれており、球根の値段もずっと高く、1球で400円ぐらいする。

ヒヤシンスを水耕栽培するには遅くとも11月の下旬までに始めて、3月初旬ぐらいには花を咲かせるようにしたい。暖かくなってくると根が腐ってしまうこともよくあるからだ。陽当たりの良いマンションなどでは、特に根腐れを起こさない配慮が必要である。それには時々水を取り替えたり、暖房機器から遠ざけておいた方がよいだろう。特に水栽培で大事なことは、10~11月の頃、球根を十分に寒さに当てることで、それから水耕栽培を始めるとよく発根する。最近ではあらゆる作物が促成栽培されて旬の季節がどんどん早くなっているが、春作物の場合殆どが一度冷蔵庫の中に貯蔵して、植物に冬が来たという錯覚をさせてから、徐々に温度を上げて育てる方法が取られている。これを怠ると花が咲かないで終わってしまうこともある。

鉢で育てるときは水はけをよくし、堆肥と山砂を混ぜた用土で育てると大きな花を咲かせることができる。しかし花が終わる頃には、球根はいくつかに分球してしまい、翌年も花を見ようとすると、なかなか難しくなることも多い。品種によっても異なるものの、特にダッチ系の場合は球根の直径が5cmぐらいにならないと、いい花は咲かないので、新しい球根を買い求めたほうが話は早い。こんなとき古い球根は公園の隅だとか、学校の花壇に10~15cmぐらいの間隔で植えておくと良い。露地で育てれば毎年美しい花を咲かせてくれることも、しばしばだからである。

庭で育てるなら、陽当たりが良くて、あまり北風のあたらないところが一番いい。特に花が咲く頃、花穂はかなり重くなって、風で折れてしまうこともあるからだ。深さ30~40cmぐらいの大きめの穴を掘って、そこに堆肥と山砂をよく混ぜた用土を、小山になるぐらいに客土して10~15cm間隔ぐらいで、深さは7cmほどに植え込んでゆく。通常はもっと浅めに植えるのだが、山にしたぶん雨や風で用土が流されやすく、いくぶん深めに植え込むのである。堆肥が手に入りにくいときには、化成肥料をコサジ1杯ぐらいずつ与えておくとよい。しかし化成肥料ばかり与えていると、病害虫がつきやすくなるので、できるだけ油粕のような有機肥料を用いるようにしたい。こうして6月下旬、葉が黄色くなるころに掘り上げて分球すると、たくさん花を見ることができるようになる。また年に一度ぐらい石灰を入れて土壌を弱アルカリ性にしておくことも大事で、これはヨーロッパから西アジア、特に地中海沿岸を原産地とする植物に共通して言えることである。

ここで石灰の話に触れてみることにしよう。

野菜の栽培などをしない我々は、石灰のことなど、ほとんど関心がない。しかしハウレンソウやムギなどを畑で作るとなると、石灰はもっとも大事なものの一つである。というのは日本の国土は火山が多いために酸性土のところが少ない。火山から噴出される火山灰や火山礫などには、硫黄酸化物などが含まれていることが多く、酸性になりやすいからだ。この火山灰の上に何万年の間に腐葉土などが蓄積され、表層部のみ黒土になっている地域も少なくない。軽井沢などがその典型で、浅間山から噴出された火山岩や火山礫、火山灰の上に腐葉土が蓄積されて出来ている。このため地表 30 cm も掘り返すと、火山礫の層になってしまう。この酸性土を中和するために石灰を入れるのである。しかし日本で石灰石の地域が少ないというわけではない。例えばセメントを採掘している埼玉県の武甲山や、新潟県糸魚川市の黒姫山、滋賀県の伊吹山などは石灰石採掘の山として知られているし、石灰は日本国内ですべての需要をまかなうことが出来るほど豊富である。日本の各地にある鍾乳洞が石灰石から出来ていることは、その昔の授業で教えられたとおりである。しかし耕作を繰り返す、施肥を続けているうちに土壌は酸性化されてくるというのも事実である。そして酸性化された土壌には必ずといっていいほど、ナメクジが繁殖してくる。ナメクジを見ようになったら石灰を入れてあげるとというのが、いわば素人園芸の基本である。また地中海からユーラシア大陸を原産地とするヒヤシンスやチューリップ、クロッカス、宿根草のアネモネやラナンキュラスなど、栽培しているうちに次第に弱ってきて、いつの間にか消えてしまうのは、土壌の酸性化によることが多い。しかしその一方で、ブルーベリーやシャクナゲの仲間、ツツジの仲間などは、アルカリ性の土壌では育てにくい。逆にピートモスなどの土壌改良剤を十分に鋤き込んでから植えないと、これも次第にやせ細ってしまうことも少なくない。大事なことはその植物の好みに合った土を準備してあげることである。そして植物栽培にとって大事なことは、どんな植物でも、以下の6点をしっかりと確認しておくことなのである。

- ① 日当たりを好むか、日陰を好むか。
- ② 湿地を好むか、乾燥地を好むか。
- ③ 多肥を好むか、少肥を好むか。
- ④ 病害虫に強いのか、弱いのか。
- ⑤ 耐寒性があるか、耐暑性があるか。
- ⑥ 酸性土を好むか、アルカリ土を好むか。

つまり植物の栽培方法は、この6点の組み合わせによって決まってくるということなのである。そして突き詰めれば原産地の環境ということになってくる。特に余り馴染みのない植物を栽培するとき、何処が原産地でどんな自然環境か、この点をしっかりと確認することを忘れてはならない。改良品種も原種と同様である。



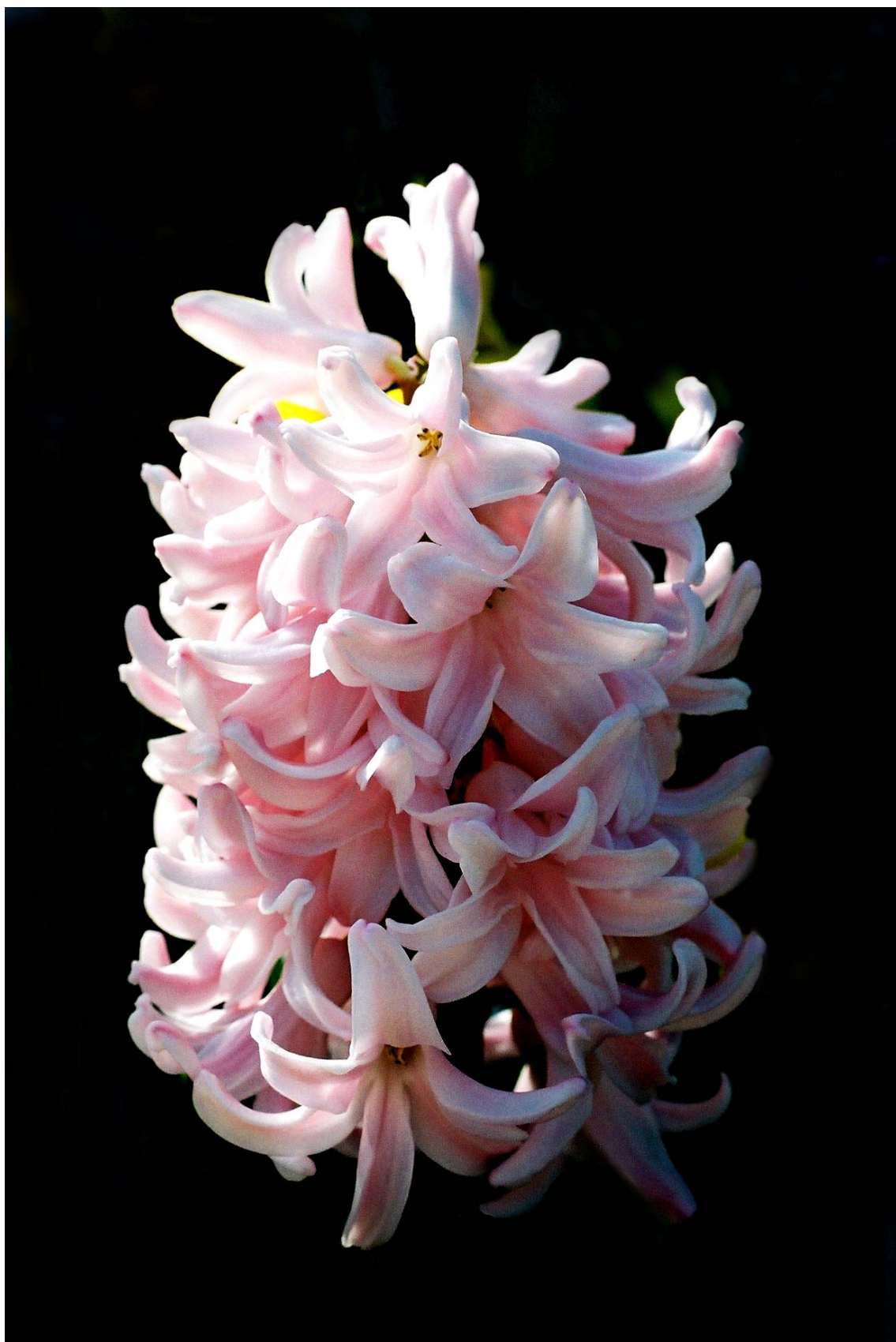
ダッチ系ヒヤシンスは花が密につき、花色も鮮やかなものが多い(埼玉県川口市)。



ダッチ系ヒヤシンス、水耕栽培するものほとんどがダッチ系である(埼玉県川口市)。



ダッチ系ヒヤシンスの球根は、直径が7~8cmもあるが、値段の方も少々高価である。



ダッチ系ヒヤシンス。今ではローマン・ヒヤシンスはむしろ珍しくなってしまった。 [目次に戻る](#)